

三井寺

世阿弥作

前

シテ 女

狂言 夢合はせ

後

ワキ 三井寺住僧

ワキヅレ 同伴僧

子方 千満

シテ 前に同じ

地は 前は京都 後は近江

季は 八月

シテサシ

「南無や大慈大悲の觀世音さしも草。さしもかしこ
き誓の末。一称一念なほ頼みあり。ましてや此程
日を送り。夜を重ねたる頼みの末。などか其かひ
なからんと。思ふ心ぞあはれなる。

下歌

「憐み給へ思子の。行末何となりぬらん。く。

上歌

「枯れたる木にだにも。く。花咲くべくはおのづ
から。いまだ若木の緑子に。再びなか逢はざら
ん。く。

詞

「あら有難や候。少し睡眠の内に。新なる霊夢を蒙
りて候ふは如何に。妾を何時も訪ひ慰むる人の候。
あはれ来り候へかし。語らばやと思ひ候。

狂言

「シカく。

シテ詞

「唯今少し睡眠の内に。新なる御霊夢を蒙りて候。
我子に逢はんと思はゞ。三井寺へ参れと新に御霊
夢を蒙りて候。

狂言

「シカく。

シテ詞

「あら嬉しと御合はせ候ふ物かな。告に任せて三井寺とやらんへ参り候ふべし。」（中入）

ワキ次第

「秋も半の暮待ちて。く。月に心や急ぐらん。」

詞

「是は江州園城寺の住僧にて候。又是に渡り候ふ幼き人は。愚僧を頼む由仰せ候ふ間。力なく師弟の契約をなし申して候。又今夜は八月十五夜明月にて候ふ程に。幼き人を伴なひ申し。皆々講堂の庭に出で。月を詠めばやと存じ候。」

歌

「類なき。名を望月の今宵とて。夕べを急ぐ人心。知るも知らぬも諸共に。雲を厭ふやかねてより。月の名頼む日影かな。く。」

後シテ一声

「雪ならば幾度袖を払はまし。花の吹雪と詠じけん。志賀の山越うち過ぎて。詠めの末は湖の。鳩照る比叡の山高み。上見ぬ鷺の御山とやらんを。今日の前に拝む事よ。あら有難の御事や。」

詞

「かやうに心あり顔なれども。我は物に狂ふよなふ。」

いや我ながら理なり。あの鳥類や畜類だにも。親子のあはれは知るぞかし。ましてや人の親として。いとほし悲しと育てつる。子の行方をも白糸の。

地「乱心や狂ふらん。

シテ「都の秋を捨てゝ行かば。

地「月見ぬ里に住みや習へると。さこそ人の笑はめ。よし花も紅葉も。月も雪も故郷に。我子のあるならば。田舎も住みよかるべし。いざ故郷に帰らん。

く。帰ればさゝ波や。志賀辛崎の一つ松。緑子の類ならば。松風に事問はん。松風も。今は厭はじ桜咲く。春ならば花園の。里をも早く杉間吹く。風冷ましき秋の水の。三井寺に着きにけり。三井寺に早く着きにけり。

ワキ「桂は実る三五の暮。名高き月にあこがれて。庭の木陰に休らへば。

シテ「実にく今宵は三五夜中の新月の色。二千里の外

の故人の心。水の面に照る月並を数ふれば。秋も
最中夜も半。所からさへ面白や。

地

「月は山。風ぞ時雨に鳩の海。く。波も栗津の森
見えて。海ごしの。幽に向ふ影なれど。月は真澄
の鏡山。山田矢走の渡舟の。夜は通ふ人なくとも。
月の誘はゞおのづから。舟もこがれて出づらん。
舟人もこがれ出づらん。

シテ詞

「面白の鐘の音やな。我故郷にては清見寺の鐘をこ

そ常は聞き馴れしに。是は又さゝ波や。三井の古
寺鐘はあれど。昔にかへる声は聞えず。誠や此鐘
は。秀郷とやらの龍宮より。取りて帰りし鐘な
れば。龍女が成仏の縁に任せて。妾も鐘を撞くべ
きなり。

地次第

「影はさながら霜夜にて。く。月にや鐘はさえぬ
らん。

ワキ詞

「やあく暫く。狂人の身にて何とて鐘をば撞くぞ

急いで退き候へ。

シテ詞

「夜庾公が楼に登りしも。月に詠ぜし鐘の音なり許さしめ。

ワキ

「それは心有る古人の言葉。狂人の身として鐘撞くべき事。思ひも寄らぬ事にて有るぞとよ。

シテ

「今宵の月に鐘撞く事。狂人とな厭ひ給ひそ或る詩に曰く。団々として海嶠を離れ。冉々として雲衢を出づ。此後句なかりしかば。明月に向つて心

を澄まいて。今宵一輪満てり。清光何れの所にか

無からんと。此句を設けて余りの嬉しさに心乱れ。

高楼に登つて鐘を撞く。人々如何にと咎めしに是は詩狂と答ふ。かほどの聖人なりしだに。月には乱るゝ心有り。ましてや拙なき狂女なれば。

地

「ゆるし給へや人々よ。煩惱の夢を覚ますや。法の声も静かに。先初夜の鐘を撞く時は。

シテ

「諸行無常と響くなり。

地 「後夜の鐘を撞く時は。

シテ 「是生滅法と響くなり。

地 「晨朝の響きは。

シテ 「生滅々已。

地 「入相は。

シテ 「寂滅。

地 「為樂と響きて。菩提の道の鐘の声。月も数添ひて。

百八煩惱の眠りの。驚く夢の世の迷ひも。はや尽

きたりや後夜の鐘に。我も五障の雲晴れて。真如

の月の影を。詠め居りて明かさん。

地クリ

「夫れ長樂の鐘の声は。花の外に尽きぬ。

シテ

「又龍池の柳の色は。

地

「雨のうちに深し。

シテサシ

「其外こゝにも世々の人。言葉の林の兼ねて聞く。

地

「名も高砂の尾上の鐘。暁かけて秋の霜。曇るか月

もこもりくの。初瀬も遠し難波寺。

シテ「名所多き鐘の音。

地「尽きぬや法の声ならん。

クセ

「山寺の。春の夕暮来て見れば。入相の鐘に花ぞ散りける。実に惜しめどもなど。夢の春と暮れぬらん。其外暁の。妹脊を惜しむきぬぐの。恨みを添ふる行方にも。枕の鐘や響くらん。又待つ宵に。更け行く鐘の声聞けば。あかぬ別れの。鳥は物かはと詠ぜしも。恋路の便の。音信の声と聞く物を。

又は老いらく。寢覚程ふる古へを。今思ひ寐の夢だにも。涙心のさびしさに。此鐘のつくぐと。思ひを尽す暁を。いつの時にかくらべまし。

シテ

「月落ち鳥鳴いて。

地

「霜天に満ちて冷ましく。江村の漁火もほのかに。半夜の鐘の響きは。客の船にや通ふらん。蓬窓雨したぐりて。馴れし汐路の楫枕。浮寐ぞかはる此海は。波風も静かにて。秋の夜すがら月すむ。三

井寺の鐘ぞさやけき。

子詞

「如何に申すべき事の候。

ワキ詞

「何事にて候ふぞ。

子

「是なる物狂の国里を問うて賜はり候へ。

ワキ

「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。去りなが

ら易き間の事尋ねて参らせうずるにて候。如何に
是なる狂女。おことの国里は何くの者にて有るぞ。

シテ

「是は駿河の国清見が関の者にて候。

子

「何なふ清見が関の者と申し候ふか。

シテ詞

「あら不思議や。今の物仰せられつるは。正しく我

子の千満殿ごさめれあら珍しや候。

ワキ

「暫く。是なる狂女は麤忽なる事を申す者かな。

さればこそ物狂にて候。

シテ

「なふ是は物には狂はぬ者を。ものに狂ふも別れ故。

逢ふ時は何しに狂ひ候ふべき。是は正しき我子に
て候。

ツレ「さればこそ我子と申すか筋なき事と申し候。急いで退き候へ。」

子「あら悲しや左のみな御打ち候ひそ。」

ワキ「言語道断はや色に出で給ひて候。此上はまつすぐに御名乗り候へ。」

子「今は何をか包むべき。我は駿河の国。清見が関の者なりしが。人商人の手に渡り。今此寺に在りながら。母上我を尋ね給ひて。かやうに狂ひ出で給

ふとは。夢にも我は知らぬなり。」

シテ「又妾も物に狂ふ事。あの児に別れし故なれば。たま／＼逢ひ見る嬉しさのまゝ。やがて母よと名のる事。我子の面伏なれど。子故に迷ふ親の身は。恥も人目も思はれず。」

ロンギ地「あら痛はしの御事や。よそ目も時による物を。逢ふを喜び給ふべし。」

シテ「嬉しながらも衰ふる。姿はさすが羽束師の。漏り

て余れる涙かな。

地「実に逢ひ難き親と子の。縁は尽きせぬ契りとて。

シテ「日こそ多きに今宵しも。

地「此三井寺に廻り来て。

シテ「親子に逢ふは。

地「何故ぞ。此鐘の声立てゝ。物狂の有るぞとて。御

咎め有りし故なれば。常の契りには。別れの鐘と
厭ひしに。親子の為めの契りには。鐘故に逢ふ夜

なり。嬉しき鐘の声かな。

地「かくて伴なひ立ち帰り。く。親子の契り尽きせ

ずも。富貴の家となりにけり。実に有難き孝行の。

威徳ぞめでたかりける。く。